

シリーズ 阿久比を歩く⑮



城山公園入口



坂部城跡から下る坂道



坂部城跡の石碑

史跡を巡る(坂部城跡)

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

今回から阿久比の史跡を巡ることにする。町立図書館隣にある坂部城跡(現在城山公園)を訪れた。

師走に入り、気温もぐつと下がり顔に当たる北風がとても冷たい。気が付くと背中が丸くなっている。そんな寒風が吹く中、城山公園入口から坂部城跡に続く細い坂道を登って行く。

坂道には、赤や黄に色付いた落葉樹の葉が落ち、風が吹くたびに舞い上がり、ころころとどんぐりが転がり落ちてくる。

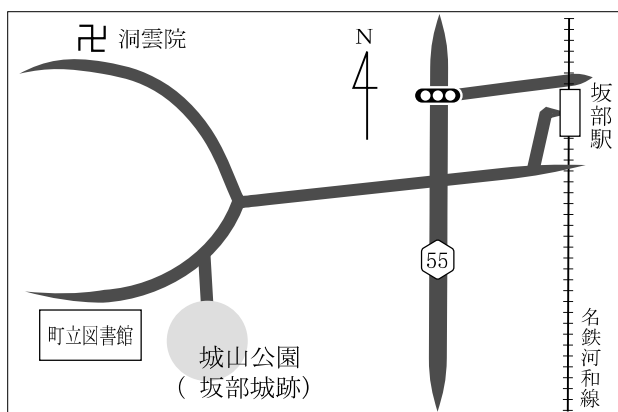
徳川家康の生母於大の方は、家康を生んだ後、天文十六年(一五四七)坂部城主久松俊勝と再婚し、織田家や今川家の人質となった幼い息子と離ればなれになる。桶狭間の戦いを控えた永禄三年(一五六〇)家康は阿久比の地で暮らす母に会うため坂部城に立ち寄ったと言われる。

現在坂部城跡には、城が建っていたと思わせる形跡は何もなく、唯一「阿久比古城跡ノ碑」と記された石碑が公園隅にひっそりとある。しか

し、今私たちが訪れ、立っているこの場所は戦国時代、生き残れるか分からない戦いを控えて、徳川家康と母於大の方が再会を果たしたドラマチックな場所である。

図書館の本を借りてきた母と子が公園を通り抜けて私たちが登ってきた坂道を下っていく。いつの時代も母は子どものことを心配している。

「走ると転ぶわよ」と母親は幼い子どもに声を掛ける。子どもはつまずいて転び泣きべそをかいている。親子は手をつないで歩き始めた。その後ろ姿をしばらく眺める。母の手の温もりを思い出し、一瞬寒さを忘れる。現実に戻ると木に一羽のカラスが止まり、口を開けて同じ方角を眺めていた。



シリーズ

阿久比を歩く⑬



固く口を結ぶ仁王像



大きく口を開く 仁王像

草木地区にある正盛院の仁王像を見に出かけた。

この寺にある仁王門（一七五二年建立）は昭和五十五年、仁王像（室町時代初期の作と推定）は昭和五十六年に町指定の文化財となっている。石畳を登りきった場所に仁王門がどっしりとかまえている。両脇に太い柱が骨組みみされ、柵の向こうに二体の仁王像が安置されている。

仁王門をのぞきこむと明かりがなく薄暗い中で、大きく目を見開いた仁王像が、一方は大きく口を開き、もう一方は口を固く結んでいる。表情からうかがえる迫力は、まさに阿吽（あうん）の呼吸で門番を務め上げているという言葉がよく似合う。

普段、悪いことをしているつもりはないが、思わず「ごめんなさい」と手を合わせて一礼してしまっただ。昔、寺は子ども達の遊び場だったよ。親も子どもがいたずらをする、仁王さんの前に連れていくぞと言え、泣いて謝ったものだ。今は子どももあまり遊びに来なくなつたし、仁

王さんと言っても、多分知らないだろうな」と笑いながら住職が話してくれた。

最近、幼い子どもが犠牲になる事件が相次ぎ、子を持つ親として大変心が痛む。仁王像は「悪を退治して善を取り入れる」いわれがあるそう。時に仁王門から飛び出し、子どもたちに近づく悪を退治してもらいたいものだ。

寺の境内には、釣り鐘がある。毎年、大晦日の午後十一時四十五分ころから除夜の鐘をつくそうだが、煩悩の数、百八回つづきの本当ですが、並んでくれた皆さん全員に鐘はついてもらいますよ。あなたたちも大晦日に来て鐘をついてくださいよ」と住職から誘いを受けた。二〇〇五年の反省をする意味も込めて、鐘をつきにかけてみようかと思う。毎年その時間はこたつの中でうたた寝をしていびきがうるさく、妻に鼻をつままれる私。多分今年も・・・。

史跡を巡る（正盛院仁王像）

あ

ぐ

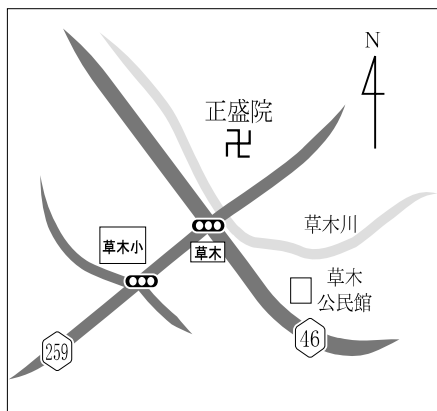
い

ぶ

ら

り

旅



シリーズ

阿久比を歩く②



たこ揚げをする子ども



宮津公民館から見た二子塚古墳



二つの丘のように盛り上がった二子塚古墳

史跡を巡る(二子塚古墳)

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

宮津地区にある二子塚古墳に出かけた。

この古墳は、知多半島で唯一の古墳時代の中期前方後円墳とされ町指定文化財となっている。

鉛色の厚い雲が空に広がり、枯れ草が古墳全体を覆っていた。前方後円墳といっても見た目には、円形の丘が二つ並んでいるように見える。この下に誰が眠り、どんな秘宝が隠れているかは謎である。

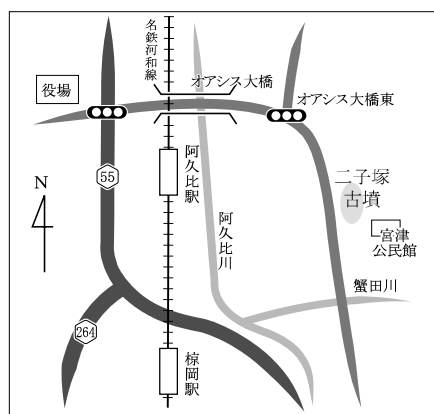
小学校五年生の時、歴史クラブに所属して遺跡や史跡をまわって古代ロマンを追い求めた私としては、古墳を目の前にして胸が高鳴り、想像力をかき立てる。

古墳イコール権力者のイメージがある。もしかすると知多半島で唯一残る前方後円墳ということは、半島を支配していた有力な権力者がこの阿久比の地に住み、阿久比は当時、政治や生活の中心的な場所だったのではと、勝手な想像をしてしまう。

古墳の周りは堀がめぐらされ、毎年七月になると、東部小学校の児童

たちが、ホタルの幼虫を放流する場所でもある。昨年私もここでホタルが、淡い光を放ちながら飛びかう姿を発見することができた。今は静かなこの場所に、次世代のホタルの子どもたちが、時の権力者と一緒に冬眠していることだろう。

ちようど私たちが訪れたこの日には、「町民風あげ大会」に向けて隣にある宮津公民館で子どもたちがたこ作りをしていた。出来上がった、たこに糸をつけて思い思いにたこ揚げの練習をしていた。糸の結び方が甘かったのか一人の子のたこ糸がほどけて古墳の方に飛んで行ってしまった。たこを取りに行き戻って来た子どもに「今、登って行った丘の下にはすごい宝物があるかもしれない、古墳という場所だけど知ってるかい」と尋ねると、「うそー。そんなの知らないよ」と全く興味が無さそうに、走り去ってしまった。北風が冷たく横切った。



シリーズ

阿久比を歩く②①



以前に発掘が行われた畑



発掘調査で出土した矢じりや土器



(中央公民館本館展示) 縄文遺跡のある神明社境内

史跡を巡る(横松遺跡)

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

横松遺跡を訪れた。昭和六十年から数回にわたる調査で縄文土器や矢じりが見つかり、現在のところ町内唯一の縄文遺跡である。

町誌の資料で場所を確認し、遺跡は横松の神明社東側一帯に存在することが分かった。まずは神明社に向かった。

新しい年となつて二週間が過ぎる。神社境内の拝殿正面には、しめ縄が飾られ、正月の名残りはあるが、人影はなくひっそりとしていた。目印となる看板もなく、現地は遺跡という感じは全くない。

あわよくばナウマンゾウの牙の化石でも見つけ考古学の定説を打ち破るような大発見をと、ひそかな夢を抱きつつ周辺を歩いた。

自転車で乗っている男性に出会う。「この辺りに縄文遺跡があることをご存知ですか」と尋ねると「詳しいことは知らないけど、ずいぶん前にあの畑の辺を発掘してたかなあ」と民家の裏側の畑を指さして教えてくれた。うれしいことに、男性の自転

車のかごの中には私が作った広報あぐいが入っているではないか。配ってくれている途中だと分かり「実はこの広報、僕が作りました。これからも読んでくださいな」と宣伝をして男性と別れる。

畑の方に行ってみることにする。畑には民家の敷地を通らなければ行けないので、住人の方(気さくな夫婦)に許しを得て中へ入れてもらう。「何か掘ってみたいんだけど、あまり珍しいものは出てこなかったみたいだよ」と夫婦は笑いながら話してくれた。

畑で白色に風化した貝を見つける。もしかして縄文人が食べた貝ではないかと思い、手に取って眺めていると「それは、食べた貝を肥料にするために何年か前にそこに捨てたものだよ」と縁側で日なたぼっこをしている夫婦に言われた。やはり大発見は、専門家による密な調査に委ねることにする。

「史跡を巡る」の連載は今回で終了します。次回からは「阿久比の村絵図を歩く」を連載します。

